

# 棚田学会通信

第59号 目次 (2019年10月4日発行)

特集 棚田と教育(Ⅲ) . . . . .	1
日本の棚田百選紹介 . . . . .	7
「棚田地域振興法」制定について . . . . .	8
事務局ニュース . . . . .	8



## 特集 棚田と教育(Ⅲ)



写真上：「役割分担しながらの作業」(提供：真田純子)、写真下：「田植えが終わって」(提供：阿久澤剛樹)

棚田の役割をしっかりと認識し、保全・保護に向けた活動に実際に関わっていくのが大人になってからだろう。特集「棚田と教育」の第3回では、生涯学習としての棚田について紹介する。(棚田学会編集委員会)

## 石積みと学び

東京工業大学環境・社会理工学院准教授 真田 純子

棚田など、傾斜地の農地では石積みが多用されてきた。そうした棚田がつくる風景は地域活性化の重要な資源でもある。しかしながら近年、石積みの技術が途絶えかけている（写真1）。



写真1 崩れたまま放置された石積み

そこで、私は石積み学校を主催し、石積み修復技術の継承を行っている。その主目的は農民の技術として伝えられてきた石積み技術を教えること、会場となる場所の石積みを修復することである。生涯教育の特集である本稿では、学びという視点から、技術継承の直接的、間接的効果について論述してみたい。

### DIYとして

ひとつ目は直接的な目的として、自分の農地を管理するための技術を学ぶというものである。もともと農地の石積みは地域の人々が自分たちで積んできたところが多く、地域内で親から子へと縦に受け継がれてきたと言える。しかしながら過疎化や高齢化などでそのような継承の方法が途絶えた今、技術の継承を広い地域で展開していく必要がある。幸いなことに、石積みの技術は日本各地、世界各地で基本原理はほぼ同じである。そのためどこで習っても、その後自分の地域の石の特性に慣れれば積むことができるのである。

実際、石積み学校の参加者には、新規就農者や定年退職後に実家の農地に向き合うようになった人など、自分の農地を直したいという人が多い。新規就農者には、環境や景観に関心の高い人も多く、空石積みは空石積みで直したいという希望が強いようである。しかしながら地域に教えてくれる人が見つけ

られず、石積み学校に参加するという人が多い。農家の人たちが石積みを習うことで「自分で直す」という文化の継承が行われていると言える。

### 職業の幅を広げるために

石積み学校では、なぜか毎回のように個人や小規模な会社の造園業の方が参加してくださっている。普段は庭の石組や石貼りなどをやっている方たちである。普段から石を扱うことは多いが、なかなか空石積みをするのではないので興味があって、というのが理由のようであるが、私はここに希望を見出している。過疎化、高齢化で地域の人たちだけで石積みを修復するのが難しく、人に頼むということを考えたとき「農地のための石工」がないのが課題である。文化財を直しているような会社に頼めばコストが見合わないし、土木施工会社だとほとんどのところは空石積みはやってくれない。普段公共事業をやっている会社は、やはり公共事業的な強度を気にするのでコンクリートを使用したがるのである。一方で、普段から個人と個人の関係で仕事をするの多い造園業者が、新しい職能として農地の石積み直すというのはしっくりくるのではないだろうか。労働力不足が問題になっている中山間地域での農地の空石積み保全の1つの方策として、造園業者の学びを支援することで「農地の石工」の誕生に期待を寄せているのである。

### 地域防災力の強化

地域の石積みを自分たちで直す、というのは地域防災力の強化にもつながると考えている。私の師匠はもう何十年も自分の住む集落の石積みを管理してきている。そのため「この場所は岩盤が近くて安定している、ここは水が多い、ここに水道（みずみち）がある」などの知識が豊富である。石積みを修復するにはまず古い石を外して土の壁をつくることから始めるので、表層的な地域の情報にとどまらず、文字通り「土の中」までの情報を知っているのである。



写真2 尾根の上に建物が集まる様子

この集落では写真を見てわかるように尾根線上に建物があり、ゆるく谷状になっているところに農地が設けられている(写真2)。尾根線上は風雨によって土がさらわれ、岩盤に近いが、谷状のところには土が集まっているそうである。そのため、尾根線上には建物、土の層が厚い谷部には農地が向いているとのことだ。地域の石積みをも自分たちで直すという行為そのものが、土地に対する知識の継承を促し、それに応じた土地利用がなされ、地域防災力の強化につながる。

また、自分たちで直すことの効果はもう1つある。東京工業大学の1年生の授業で石積みの実習を行っているが、以前、実習で積んだ数日後に大雨が降った。その後におこなったとりまとめの授業で「大雨が降ったときに崩れないか心配になった」という感想が出た。大学1年生の前期なのでまだ専門知識もほぼなく、「インフラを利用する市民」である。それまでインフラが壊れるかどうかなども気にしたことはほとんどないだろう。しかし、いったん自分が手をかけることによって雨が降ると気になるのである。これはすごい変化だと思った。地域の石積みも同様で、これが行政等が発注し、施工業者が行う「大きな工事」になると、地域の人々の手から離れてしまうのである。「壊れたら役場に言えばいい」という気持ちになってくる。自分たちで石積み直すという行為は、自分たちの地域に対する責任感にもつながってくる。これがさらに地域防災力を強化することにつながるのではないかと思う。

### チームビルディング

石積み学校を開催するたびに思うのは、チームビルディングとしての効果である。石積み修復の作業は積む前の準備として古い石を外して土を掘り土の壁をつくるという段階と、実際に積む段階に分けられる。準備段階の作業は、石を分類しながら山状に置きつつ、ツルなどで土をほぐし、かき板で土を手箕に集め、土置き場に山にするという単純作業である。しかし、この一連の作業を1人でやろうとすると道具をいちいち持ち替えたり、石や手箕を運ぶために移動したりとなかなか忙しい。また、棚田などの狭い土地で各々がそれをやり始めると大渋滞が起り、リスクも高まる。一方で、各作業を手分けして協力すると驚くほど効率が良くなる(表紙写真)。

積む作業も、作業としては積み石を置き、その後ろに小さめのグリ石を入れるという、単純なものである。これも、積み石を探し運んできて、考えながら積み、位置が確定したらグリ石を集めてきて入れる、ということをして一人でやると非常に効率が悪い。

立ったり座ったりの作業も増え、疲労しやすい。これを1)グリ石集め、2)グリ石を運んで入れる、3)積み石を探して積む場所の近くに並べる、4)積む、という作業分担をすることで、格段に労力の節約と効率化が図れる。このとき、2)と3)は兼務しても良い。グリに係だと思えば1)と2)が兼務になりそうであるが、1)は座ったまま、2)と3)は立ったままの作業、石の山と積む面の間をうろうろする人なので、労力の節約、混雑の低減のためにもこれが都合が良いのである。

石積みは、目指すところが単純であるために必要な作業がすぐに理解でき、役割分担や自分の役割の発見が容易である。そして役割分担と協力の効果が非常に実感しやすい。しかしながら単純作業というわけでもなく、常に頭を使う。そして体力も使うために、出来上がった後の「風景の一部をつくった」という達成感もひととき大きい。こうした一連の特徴がチームビルディングに向いていると思うのである。

実際、石積み学校では、作業を開始するとだいたい2時間経たないうちに役割分担が出来上がり、ひとつのチームになる。その日初めて会った人達であるが、ほぼ毎回、そのような状況になる。これはぜひ体験してもらいたい感覚だ(写真3)。



写真3 石積み終了後には達成感から必ず撮影会になる

以上のように、石積みと学びについていくつかの効果を論述した。石積みの技術はひとつの文化であり、単純に石積み擁壁を作るという工学的な意味だけでなく、いろいろな効果がそこに付随していると思う。

棚田と学ぶ 新入社員里山研修の現場から  
トロノキハウスオーナー 里山アセットマネージャー  
阿久澤 剛樹

東京の某ホテルの新入社員研修として新潟県十日町市にある星峠の棚田の一枚を借りて、一般社団法人

人源流域資源再生ネットワーク（通称 Trico）の池田徹氏およびその仲間たちと一緒に田植え・稲刈り研修を開始して今年で5年になる。

企業のボランティア活動、フィランソロピー活動での田植え、稲刈りは今では珍しくはないが、公式な研修で田植えをする会社というのは比較的珍しいかもしれない。ホテル業であるため、食との関連は深く、新入社員の中には厨房に入る者も毎年数人いる。ホテル内のレストランに配属される者もいる。そういう新入社員に、米を作ることの楽しさや難しさを実感し、自分の作った米を提供することの喜び、プライドを感じてもらいたいと思ったのが本研修を開始した直接の理由である。

バブル経済崩壊、リーマンショックなど、経済状況が悪化すると企業は研修費を切り詰める。また通年採用の実施など採用時期の分散、終身雇用という考え方の終焉、新人の価値観の変化などもあり、自分が新入社員時代には隆盛を極めた新人全員での合宿研修は少なくなったようである。そうした中で復活した宿泊研修のメインイベントが「田植え」というのだから、新人達も人事部も最初はさぞや面食らったはずだ。

実際にやってみると意外な反響や効果の連続だった。特筆すべきは、出席者間のコミュニケーションと連帯意識が格段に高まったこと。参加者は2日間の研修中様々な状況でお互いを知るようになる。まず、十日町へ向かうバスの中。途中休憩も入れて道中約4時間。生まれて初めて体験する田植えに、否が応でも期待は高まりバス内のテンションも上がる(写真1)。



写真1 バス移動で星峠に到着

駐車場から田植えを行う田圃まで星峠の棚田を眺めながら農道を歩くとあちこちで「わー、きれい」「おー、絶景だ」と声があがる(写真2)。

作業が始まれば当然ハプニング続出、あちこちで笑いがおきる。それでもコツをつかむと、一気に作業が進む。苗を植える者、畦から苗を補給する者など、自然に役割分担が行われる。自分で植えた苗を振り返って植え方を工夫する(写真3)。



写真2 農道を歩いて棚田に向かう



写真3 田植えの様子

メンターとして参加する管理職や先輩社員には毎年参加している者もいて、田圃のあちこちで田植えコーチングが繰り返される。新入社員以上に楽しんでいるように見えるのが外国人幹部達だ。こうした機会がなければ訪れることもなかったであろう棚田地域に足を運び、日本の稲作文化を体験できるのだから楽しくないはずがない(表紙写真)。

集合研修の初めにゲームなどを行って出席者間の心理的距離を縮めることをアイスブレイクと呼ぶが、開放的な自然環境下での非日常のグループ作業は最高のアイスブレイクになる。他業界同様、ホテル業界も人手不足で、採用と定着率の向上は重要な経営課題である。近年のホテル開業ラッシュもあり、初年度離職率は高止まりしている。配属後、忙しい毎日を送る中、悩みも多い。そんな時によりありがたいのは同期入社と同僚との気の置けない会話だろう。先輩社員や幹部との心理的距離も田植え研修後には非常に近くなっていて、本音の話もしやすい。ベテラン幹部もそのあたりはよく心得ていて、積極的にコミュニケーションを図っている。

総支配人(チャールズ・ジャック)は5年前に着任したオーストラリア人である。大きな体と人懐っこい笑顔がトレードマークの生粋のホテルマンで、田植え研修は彼の着任の年に始まった。厳格な組織

内ヒエラルキーが残る外資系高級ホテル業界で、国際的ホテルブランドから派遣され現場のトップに君臨する外国人の総支配人が、20歳そこそこの新人と一緒に大部屋で2段ベッドに寝るとするのは、通常では考えにくい光景であるため、この提案を彼がどう受け取るかが心配だったが、それは全くの杞憂に終わった。おっかなびっくり田圃に足を入れる新人を横目に、チャールズは毎年先頭にたって田圃に入り、率先垂範を実践している。彼の謙虚な姿勢はまさに、実ほど頭を垂れる稲穂のようだ。

2日間の研修中、タイムリーに行われる池田氏の解説が参加者に様々な気づきを促す。池田氏の本業は気象予報士で、東京と十日町の二地域居住生活をしながら食と農を通じた地域おこしを長い間実践している。生態系の変化、気候変動による水不足、ブナ林の役割、集落の高齢化と過疎化、など、棚田地域は概して社会課題の最先進地域である。と同時に、豊かな自然と文化の中での里山の暮らしはゆっくり、静かで、簡素である。「都市と里山、さて本当に豊かなのはどちらだと思いますか？」という問いかけが、参加者の心に静かに染み込んでゆく。

近くの温浴施設で棚田を見ながら温泉に浸かった後、宿泊先に向かう。三省ハウスという廃校になった小学校を改装した宿泊施設だ。夕食後は、体育館で小グループに分かれて地元の人達を囲んで雪里の暮らしや文化についての聞き取り。実によくできたプログラムである。そして隠れたメインイベントが、深夜の大ドッジボール大会。プログラムには無いのだが、そこはエネルギーレベルの高い若者達。夕食後、三々五々体育館で遊び始めると、いつの間にか大スポーツ大会が始まる。そこに、ホテル幹部や人事部も加わり、絶叫の国際ドッジボール大会(ある年はフットベースボール大会)となる。大騒ぎの後は食堂での懇親会でのどを潤し、話は続き、夜は更けてゆく。

わずか2日間ではあるが、その間、参加者の置かれる環境はいろいろ変わる。その様々な場所の変化が新鮮で密度の濃いコミュニケーションを生み出す。里山、棚田という非日常空間はこの研修の舞台であり、この研修は、里山・棚田というテーマパークを舞台に繰り広げられる大人の修学旅行。棚田の多面的機能の一つに癒しがあるが、さらに積極的な意味を持たせて、イノベーションの誘発、インキュベーション機能を加えたいと思う今日この頃である。

文章を考えるのに良い場所(=創造的なアイデアが浮かびやすい場所)として、馬上(馬に乗っているとき)枕上(寝床に入っているとき)厠上(便所に入っているとき)といわれるが、私はこれに「田上」(田んぼにはいつているとき)を加えたい。旨い米を育む美しい棚田は、同時に、ひとの心を解放

し、創造力を刺激し、人と人をつなぎ、新しいアイデアが育つ知的生産の場でもある。

「価値をかたちに、たからをチカラに」は里山アセットマネジメントのミッションであるが、里山・棚田での田植えを中心とする企業研修は棚田の根源的な価値、あるいは棚田の多面的なチカラの有効な活用方法であり、日々の働き方改革、生産性向上、社内コミュニケーション向上に勤しむ企業にとって願ってもない教育の場となるのである(写真5)。



写真5 みんな笑顔で

以下は新人が提出した研修レポートからの抜粋である。

「2日間終えて素直に思ったことは、『良い経験ができた!楽しかった!』です。田植えってホテルマンがすること?って思っていたんですが、米作りの大変さや自然に直に触れ、今まで当たり前にしてきたことを考え直すようになりました。山菜がこんなにも美味しいものだと思わなかったし、人の温かさや住んでいる方の笑顔って東京の人の笑顔と違うのかもかもしれません。東京は交通の便も良く、ネット環境や電気など良い所がたくさんですが、毎日みんな怒っているような顔の人たちばかりの中で生活するのは、十日町でのびのびと生活するのでは、自分の生き方が変わるなど。1回ではどこか物足りない町でした。」

棚田の持つ無限のパワーと、手弁当でサポートしてくれる地元の皆様、友人たちに感謝しつつ、この研修を続けていければと思っている。

### 棚田の教育効果

早稲田中学高等学校教諭 秋本 洋子

縁とは不思議なもので、私は大学の卒業論文、そして大学院の修士論文を棚田に関する内容でまとめ

た。そして今、中高一貫校で地理の教員として教壇に立っており、この棚田学会で編集委員を務めている。長い付き合いになる。私自身の生涯学習のテーマが、まさにこの棚田である。

大学では自然地理（主に地形など）を学ぶゼミに所属していた。最近の研究はテーマが細分化され、地理学の本来の目的である「自然と人間との関係性を追求する」理想から離れた内容が多いように思える。では、「自然と人間との関係性を追求する」テーマとは？そう、「棚田」である。

以下、学生時代に調査した内容を一部紹介する。

近年、学校教育における体験学習が重視されており、社会科の単元「身近な地域」を例に野外観察の重要性を主張されているが、教員自身が野外体験が乏しいこと、また生徒も実際に農作業等を経験したことがないため、棚田の放棄など現代の農業問題に対する興味が薄い。

そこで、長野県北安曇郡八坂村（現：大町市八坂）の「堰普請」（写真1）と、千葉県鴨川市「稲刈り」（写真2）を事例に、棚田での体験学習の意義について考察を行った。



写真1 八坂村の堰普請の作業の様子

車両が通行可能な所まで車で運んできた後、パイプを担いで細い山道を運ぶ。1本約40mで10kg。急な山道を運ぶには大人でも6～7人は必要である。

「堰普請」とは田に水をひく堰を掃除し、修理することである。昔は村の「結」による共同作業であったが、地元農家の高齢化による人手不足のため、それが困難となっている。今回は、山道の草を刈り水漏れの箇所を調べ、そこに重い導水パイプ（昔は木枠、現在はゴム製）を皆で運び、穴が開いて水漏れが激しい古いパイプと新しいパイプを交換するという作業内容で、棚田での農作業の大変さ、水の大切さを体感させられるプログラムであった。

一方、鴨川市では地元農家の人達から鎌の持ち方・使い方をはじめ、稲のつかみ方・刈り方、刈った後の稲の束ね方、その稲を掛ける「ハサ」の作り方、そして干し方まで丁寧に教わった。作業そのものは2時間ほどで終わり、昼食は地元農家の奥様方が棚田米のおにぎりや山菜の天ぷらなど地元の食材を用いた料理でもてなしてくれ、楽しい思い出が残るプログラムであった。

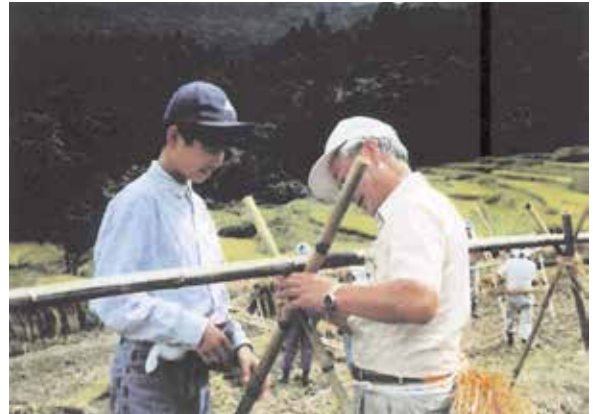


写真2 鴨川市における農業体験の様子

参加した小学生が地元農家からハサの組み立て方を教わる。ここでは稲を掛けるハサを作るために数本の竹と藁を用いて、それらを組み合わせ縛って作る。

棚田での体験学習の有効性を図るため、両プログラムで興味・関心度合いの変化に関するアンケート調査を行った。結果は、参加前より参加後の方が棚田に対する興味・関心度合いが子供から大人まで各年齢層とも高まっていた。

今回の調査ではプログラム参加者（都会の人）のみならず、地元農家の方々の心境の変化も明らかになった。堰普請を行った八坂村は、日本の山村留学の発祥の地でもある。山村留学とは、都市部の小中学生が親元を離れ、自然豊かな農山漁村で生活を行うというもので、公益財団法人「育てる会」が中心となり、年間を通して棚田地域での体験学習が可能である。ここでは自分達の土地にもうあまり愛着を持っていない住民らが、山村留学してきた子供達によって地域の良さを再確認する一つの手段となっている。この山村留学をきっかけに、自分達の土地をあまり良く思わないというマイナス指向から、逆に自分達の土地の良さを見直すプラス指向へと意識の転換がなされるようになった。これは、大変重要な意義をもつ。

また、都市住民側の意識改革もさらに必要である。小中学校、高校、大学、企業、NPOなど各年代層にもっと棚田に関心をもってもらおう努力が必要であ

る。具体的には例えば、小学校から棚田の景観は美術で絵画描写の対象にできる。社会科では、飛鳥に都が置かれる前から存在していたと言われる棚田の歴史や世界遺産の話（コルディレラの棚田など）もできる。TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）の問題を絡めて現代世界の農業や経済の話もできる。また、棚田周辺の植物や生物は理科の対象として授業に生かすことができる。家庭科の食育にも役立つ。棚田は複数の教科において、また教科の枠組みを超えた総合学習として重要な教育資源となる。その際、棚田の多面的な機能を説明しておく必要がある。その後、実際に現地に赴くとよい。修学旅行の一部などに組み込むことが出来れば良いが、それが困難なら日帰り遠足や研修として行くこととよいだろう。写真で見る・聞くより、現地で体験することが重要である。

昨今、田舎に行ったこともなく、農作業をやったことがない子供が多い。親も子供も農業に関心がないければ、一生農業体験をすることもないだろうし、農村や農業に対する関心は薄いだろう。棚田がある中山間地域に赴いて実際に農業体験することは、グリーンツーリズムのみならず、エコツーリズムに相当する。都心近郊の観光地に行くより、様々な意味で意義があると思われる。

大型機械の導入が困難な棚田において、機械を使わず手作業によって作物を育て命に触れる感動、農作業体験からの喜びから農業への関心が高まるだけにとどまらず、棚田には環境保全の役割があり、豊かな生態系、棚田独自の土木技術や農村文化が豊かに残り、そこに生きてきた先人達の苦労や生きる知恵・力が刻まれている。これらを学ぶことで、地域の豊かさをも見出せるのではないだろうか。子供達の健康回復、情操教育にもなる。また作業が大変な分、米ができた時の喜びは大きい。米が食卓に出てくるまでにどれだけの手間と時間をかけたかを自らの体験で理解できるため、食べ物を残すことの節約にも繋がるだろう。

川下（都市部）に住む自分達（消費者）が、常に川上（上流にある棚田地域）を支える農家（生産者）の恩恵を受けているということを感じ、一人一人が「今自分にできることは何か」ということを考え、少しずつでも行動に移していくことが棚田も含めた日本の農業の将来を支えていくことに繋がるだろう。そういう意味で、この棚田という資源は、まさに日本人にとって最良の生涯学習テーマであると思う。

## 日本の棚田百選紹介

### 富山県富山市八尾町「三乗の棚田」

富山市農林水産部農林事務所農業振興課 野田 典子

全国的に有名な「おわら風の盆」で知られる富山市八尾町の旧市街地から車で南へ10分ほどのところに三乗地区の棚田がある（写真1）。平成11年に「日本の棚田百選」に選ばれ、近くに祖父岳、南に飛騨山系白木峰、東に立山連峰が一望できる絶景スポットでもある。



写真1 三乗の棚田

一概に「棚田」と言えば、田んぼ一枚一枚が非常に小区画であり、手作業に汗する姿を思い浮かべますが、ここ三乗地区は昭和50年代に圃場整備を行い、大型機械で作業可能となっている。如何せん、法面の高さが3メートル以上あるところが多く、草刈り作業はやはり四苦八苦であるが。

さて前述した平成11年の「日本の棚田百選」への選定がきっかけとなり、平成13年の「みのり棚田の学校実行委員会」の設立へとつながる。

それ以来、毎年「みのり棚田の学校」が開催され、子どもたちの声が木霊するようになった。

みのり棚田の学校は毎年の定員が約30名。都市住民と地元住民が共同で農作業を行う。5月には春の農作業体験、粹ころがし（写真2）に始まり手植えの田植え、そしてサツマイモやカボチャの苗も植える。9月には秋の農作業体験、これもまた手刈りでの稲刈り後、サツマイモを収穫し、生産の意味合いと収穫の喜びを実体験する。

みのり棚田の学校は家族連れでの参加が多く、その半数以上はリピーターである。地元住民と農作業体験や昼食を共にしつつ、人々は自然の有難みや棚田の魅力を噛み締める。



写真2 P 杵ころがし子供達手伝う

加えて実行委員会が年5回発行している「みのり棚田の学校だより」は、棚田の魅力発信ばかりでなく、この学校の取り組みに対する市域住民の理解と協力にもつながっている。また、カリキュラム終盤には、三乗地区の南に位置する「仁歩ホタルの里」にも訪れ、子どもたちは「自然の大切さともろさ」を学んで「心のお土産」にする。

この活動を通して棚田の保全に取り組んで19年、計38回のイベントを重ねてきたが、実行委員からも高齢化を心配する声が聞かれる。「この学校をいつまで続けていけるだろうか。」

彼らにとって一番の課題は後継者育成。時は令和、新しい時代、そして20周年記念イベントの成功に向けて、新しい担い手の可能性も模索しながら、この棚田を育む自然と学びの場を次世代につなげていきたいものである。

### 棚田地域振興法案について

早稲田大学名誉教授 中島 峰弘

2019年6月、通常国会の衆参両院で自民党が提出した「棚田地域振興法案」が全会一致で可決され、成立した。その内容は理念法に近いもので、農家の所得向上を図った中山間地域等直接支払のような画期的なものではないが、要綱の第1条に「貴重な国民的財産である棚田を保全し」と述べてあるように、国が棚田に価値を与えたという点で大いに評価できるものである。

実際の適用は、まず都道府県が政令に規定した条件地域、たとえば旧市町村単位（昭和25年2月現在の行政単位）などの条件をクリアした棚田地域を確定し、その地域内で農業者、農業者が組織する団体、農業者以外のNPO法人などが棚田地域振興協議会を設立しなければならない。

さらに協議会は、国が設けるコンシェルジュの指導・案内により、各省庁がすでに準備している事業

の中から必要なものを選び、誘導するという仕組みである。従ってトップダウンではなく、ボトムアップ方式で上へあげていく施策であるということを心に止めておかなければならない。

## 事務局ニュース

### ■棚田学会 2019年発表会および発表募集のお知らせ

#### ◎棚田学会 2019年発表会

- 棚田学会では以下の日程で発表会を開催いたします。
- ・日時：2019年12月14日（土）13:00～17:00
  - ・会場：立正大学品川キャンパス 11号館 1162教室

#### ◎発表募集

同時に以下の要領で会員および高校生、大学生、大学院生の発表を公募します。

- ・募集数：5題（口頭発表）
- ・発表者：原則として棚田学会会員。但し高校生、大学生、大学院生は会員以外も応募できます。
- ・発表内容：学術研究、調査事例、活動事例、政策・行政紹介など、棚田および棚田が立地する農山村空間に関するものなら分野や内容を問いません。
- ・発表時間：25分＋Q&A 5分
- ・応募締切：11月2日（土）
- ・応募・問い合わせ：棚田学会研究委員会 発表会担当  
k-yasui@qf7.so-net.ne.jp 090-1405-3555

### ■ 2019年度石井進記念棚田学会賞候補者募集

自薦他薦を問いません。詳しくは同封の「棚田学会賞公募案内」をご覧ください。

### ■『棚田学会誌 20号』投稿原稿募集のお知らせ

締切 2020年1月6日（月）消印有効  
詳しくは同封のチラシをご覧ください。

### 【編集後記】

何かのきっかけで棚田を知り、それがもとで棚田に興味をもち、何とかしたいという思いが芽生え、学校でも、企業でも、一般の生活の場においても、棚田に何か関わってみようかという人が一人でも増えてくれることを望みたい。（秋本洋子）

棚田学会通信 第59号 2019年10月4日発行

発行 / 棚田学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育・総合科学学術院 高木徳郎研究室内

TEL: 03-5286-1572 FAX: 042-385-1180

E-mail: tanadagakkai@gmail.com